



「失意泰然，得意淡然」
川重 CE 111、座敷何のリーノード

亀井 俊郎氏

(1933~2004)

【経歴】	
1932年	茨城県水戸市に出生
1955年	横浜国立大学工学部造船工科学卒業
1957年	川崎重工業（株）入社
1958年	同社・機軸事業本部事業部長兼野田工場長
1959年	同社・取締役技師長、機軸・鉄鋼事業本部事業部長兼F1、機軸事業部長
1959年	同社・機軸・鉄鋼事業本部事業部長兼F1、ロケット事業部長
1961年	同社・常務取締役技師長、資材本部長
1965年	同社・専務取締役技師長、資材本部長、営業総経本部長兼F1課長
2000年	同社・常務取締役会長退任
2003年	同社・特別顧問就任
2004年	尚存中病気の為に父上・ミツノで急性心不全のため薨去（享年71歳）

業界関連

1999年	社団法人	日本産業機械工業会	副会長
1999年	社団法人	関西経済連合会	科学技術委員会委員
1999年	社団法人	日本造船工業会	会長（～2001年）
1999年	造船協	商産造船合理化審議会	委員
1999年	財団法人	大分県工業・総合材料研究開発協会	理事長（～2001年）
1999年	造船商工業会	航空工業審議会	委員
2000年	スーパーマリン	クラブスタービン技術研究組合	理事長（～2001年）
2000年	社団法人	日本経済協協会	副会長
2001年	日本船舶輸送出船	理事長	

1933年 創立「日本船舶技術者協会」(現・船政学会)
 1935年 工学技術者として、船政学会に入会
 1938年 第8代船政学会会長(～1939年)
 1940年 弘明造船所 創立
 2000年 横須賀造船所 開設
 2001年 内閣府 造船審議会 造船部会長(～2004年)
 2002年 内閣府 造船審議会 造船部会長 戦略委員会 専門委員

亀井俊郎氏業績

[illegible]

■造船からスタートした亀井氏は、次第に生産管理技術を専門とするようになり、造船の世界を離れ鋼構造物全般に係り、新規事業の立ち上げや赤字部門の立て直しに取り組むことになる。橋梁や鉄骨などを造る新工場の立ち上げ、砕石機などを扱う事業部の再建、フットボール・オートション事業（FA）部門の立て直し、東欧ロケットの関連設備事業の立ち上げなど、逆境の中にあっても川重の社業の伸長に大きな貢献を果たした。同氏は溶接技術や生産管理、品質管理の分野で新技術の導入や多岐にわたる特許活動など技術的リーダーシップを發揮し、社内では18の特許[Industrial

Engineering) 導入の祖として高名と言われている。その頃出願された特許並びに川崎重工技報に発表された技術論文2編(橋梁の生産情報システムとライン生産システム、揚水発電所水圧鉄管の製材新工法「カプセル工法」の開発)を展示資料に示している。

川崎重工を支える多くの事業分野での貢献が評価され、亀井氏は徐々に社内の企業経営に携わることになり、1989年取締役、1993年には常務取締役、1995年専務取締役を経て、1997年（平成9年）5月代表取締役社長に就任した。公営投資の抑制と民間投資の激化によって、受注競争が激進に悪化する中で、亀井であったが、この時のNIXIEE BUSINESSの取材には、「10歳の娘と同じ時期に社長に指名されたのに、この社長から17歳の娘より聞かされたこと、長い。長いほど、やりがいも増すと亀井氏は言っているようにさえ見える。」と語り合っていた。亀井氏の所有の車は、「走車無難、得意無難」(物事がうまくいかなくなっても、焦らず落ち着いて時の到来を待つべき)と/うまくいける時代には、この言葉に強い意図で語るべきであった。であったという。お資

「航空」の副題「百鬼集」を撰文資料に示している。1949年、1949年の日本造船工業協会会長就任の要職を、彼が、韓国造船業の大勢の中での造船工業者であったが、造船業が引き続き世界の造船業のリーダーとしての地位を保持するには、先ず技術力を強化するの必要があり、その為に取り組むべき課題を従来の製品に比しさらに高度な科学技術分野を含む、航空技術、航空機を指導した。その地内閣府総合科学技術会議門委員、横浜国立大学運営諮問会議委員として科学技術政策、大教育に関するその改善・活性化に取り組んだ。また、同志会組織の弘道航空学会第8代会長を務めた。

逆境楽しむ指揮官、コスト競争へ舵取り

[illegible]

172

日経ビジネス 1997年12月1日号

百朝集

篤

● 2014/11/15

混迷の時代に

人の上に立つ心得

指針として大いに

福林

10

『不刊集』

